

平成30年度病虫害発生予察予報第4号（7月）

平成30年7月5日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生面積※
水稻(早期稲)	いもち病(穂いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ	<u>やや多(中西、西)</u> 、平年並(東、中央) <u>多(西)</u> 、 <u>やや多(中央)</u> 、少(東、中西) <u>多(中央、中西、西)</u> 、やや少(東) <u>多(中西)</u> 、平年並(中央)、少(東、西)
水稻(普通期稲)	いもち病(葉いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ	<u>やや多(東、西)</u> 、平年並(中央、中西) <u>多(西)</u> 、やや少(東、中央、中西) 少(県下全域) 平年並(中西)、やや少(東、中央、西)
かんきつ類(温州みかん)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>やや多(中央)</u> 少(中央) 少(中央) <u>多(中央)</u> 少(中央)
かんきつ類(中晩柑類)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ カメムシ類	<u>多(西)</u> 、少(東、中央、中西) <u>多(中央)</u> 、やや少(東、中西、西) <u>多(中央)</u> 、少(東、中西、西) <u>やや多(東、中央、中西)</u> 、平年並(西) <u>やや多(中西)</u> 、平年並(東)、少(中央、西)

※ () 内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部

I 気象予報（高松地方気象台 6 月 28 日発表）

＜予想される向こう 1 か月の天候＞ 6 月 30 日から 7 月 29 日

期間の前半は平年に比べ曇りや雨の日が少なく、後半は平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう 1 ヶ月の平均気温は、高い確率 50% です。降水量は、少ない確率 50% です。日照時間は、多い確率 50% です。

週別の気温は 1 週目は高い確率 70%、2 週目は高い確率 50% です。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	要素	低い(少ない)		平年並	高い(多い)	
1 ヶ月	四国地方	気温	20	30		50	
		降水量	50			30	20
		日照時間	20	30		50	

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

期間	対象地域	低い		平年並	高い
1 週目	四国地方	10	20	70	
2 週目		20	30	50	
3 ～ 4 週目		30	40	30	

＜予報の対象期間＞

1 ヶ月： 6 月 30 日（土）～ 7 月 29 日（日）

1 週目： 6 月 30 日（土）～ 7 月 6 日（金）

2 週目： 7 月 7 日（土）～ 7 月 13 日（金）

3 ～ 4 週目： 7 月 14 日（土）～ 7 月 27 日（金）

II 病虫害発生予想

1 早期稲の病虫害

1) いもち病（穂いもち）

発生量：やや多（中西部、西部）、平年並（東部、中央部）

根 拠

- (1) 6 月の調査では、県下全域で発生が見られ中西部、西部では発生が多かったが、進行型病斑はほとんど見られなかった。
- (2) 向こう一ヶ月の降水量は少なく、日照時間が多い確率がともに 50% と予想されており、いもち病の増加要因としてはマイナスの確率が高い
- (3) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では 6 月 24 日を最後に、早期稲地帯では感染好適日が確認されていない。早期稲の出穂は 6 月 6 半旬から始まっており、葉いもちから穂いもちへの移行は多くないと考えられる（BLASTAM による葉いもち発生予測判定状況は病虫害防除所 HP を参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。

(2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、使用回数は作期を通じて1回とする。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（西部）、やや多（中央部）、少（東部、中西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県東部、中央部、西部で発生が見られた。県中央部、西部では平年よりもやや多～多めの発生面積であったが、東部は少なかった。また、発生程度は東部、中央部、西部で平年並、中西部では低かった。

(2) 7月の気温は高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられてないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：多（中央部、中西部、西部）、やや少（東部）

根 拠

(1) 6月の調査では県中央部、中西部、西部で発生が見られた。発生面積はいずれの地域も平年より多かったが、発生程度はいずれも平年並であった。

(2) 7月の気温は高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：多（中西部）、平年並（中央部）、少（東部、西部）

根 拠

(1) 6月の調査では県中央部、中西部、西部で発生が確認され、中西部では発生面積が平年よりもやや多かった。発生程度はいずれも平年以下であった。

(2) 7月の気温は高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合など高密度になった場合には薬剤防除を行う。

2 普通期稲の病害虫

1) いもち病（葉いもち）

発生量：やや多（東部、西部）、平年並（中央部、中西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県下全域で発生が見られた。東部、西部では平年に比べ発生面積が多かったが、他の地域は平年以下であった。また、発病程度はいずれの地域も平年並であった。

(2) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では6月24日以降、普通期稲地帯で感染好適日が確認されているが、7月の降水量は少なめの確率が高いと予想されているため、発生の増加は多くないと考えられる（BLASTAMによる葉いもち発生予測判定状況は病害虫防除所HPを参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、これらの剤の使用回数は作期を通じて1回とする。
- (3) 窒素過多は発病を助長するので、穂肥等の施用は生育状況を見ながら適切に行う。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（西部）、やや少（東部、中央部、中西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、西部で発生が見られ平年に比べ発生面積が多かった。その他の地域は平年以下の発生であった。
- (2) 7月の気温は高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられてないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：少（県下全域）

根 拠

- (1) 6月の調査ではいずれの地域とも発生は確認されなかったが、気温の上昇とともに発生がみられるものと思われる。

対 策

- (1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：平年並（中西部）、やや少（東部、中央部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県中西部で発生が見られたが、他の地域では発生は確認されなかった。
- (2) 6月末現在、予察灯への飛来も認められていない。
- (3) 7月の気温は高めと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合には、産卵痕や吸汁により生育被害が出る可能性があるため、薬剤防除を行う。

3 カンキツ（温州みかん）の病虫害

1) そうか病

発生量：やや多（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では発生面積はやや多く、発病程度は平年並の発生であった。
(2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：少（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では果実での発生は確認されなかった。
(2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
(2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：少（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では発生は確認されなかった。
(2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：多（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査では平年に比べ発生面積はやや多く、発生程度は高かった。
(2) 7月の気温は高く、降水量は少なめの確率が高いと予想されているため、既発ほ

場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の回避を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5) カメムシ類

発生量：少（中央部）

根 拠

- (1) 6月の調査ではほ場での発生は見られなかった。
- (2) フェロモントラップへの誘殺数は、中央部では平年よりも少ない。

対 策

- (1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、園内をよく観察して、飛来を確認したら防除を行う。

4 カンキツ（中晩柑類）の病害虫

1) そうか病

発生量：多（西部）、少（東部、中央部、中西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、西部で発生が見られ、発生面積は平年に比べ多かったが発生程度は平年並であった。
- (2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：多（中央部）、やや少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県下全域で発生が見られ、中央部では発生面積は多く、発生程度は平年並、その他の地域は平年以下の発生であった。
- (2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられる。

対 策

- (1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。
- (2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：多（中央部）、少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県中央部で発生が見られた。中央部では発生程度は高くないもの

の、発生面積は平年よりも多かった。

- (2) 7月の降水量は平年より少ない確率が高いと予想されているため、今月と同様の発生が続くと考えられ、7月上旬の台風の影響で、既発ほ場では発病の増加が予想される。

対 策

- (1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：やや多（東部、中央部、中西部）、平年並（西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県下全域で発生が見られた。平年に比べ、発生面積が多い地域は見られなかったが、県中央部、中西部では発生程度がやや高かった。
(2) 7月の気温は高く、降水量は少なめの確率が高いと予想されているため、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

- (1) 薬剤抵抗性の回避を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

5) カメムシ類

発生量：やや多（中西部）、平年並（東部）、少（中央部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査ではほ場での発生は見られなかった。
(2) フェロモントラップへの誘殺数は、中西部で平年よりも多く、東部で平年並であるが、他の地域では平年よりも少ない。

対 策

- (1) 果樹園周辺の雑木林から飛来してくるので、園内をよく観察して、飛来を確認したら防除を行う。

農作物の病害虫防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病害虫防除所ホームページ（こうち農業ネット）

- ①病害虫発生予察月報、病害虫発生予察予報
- ②病害虫発生予察注意報、病害虫発生予察警報、病害虫発生予察特殊報
- ③病害虫発生予察技術資料
- ④新しく問題となっている病害虫 etc.